

〈研究動向調査の報告〉

「CareerからWorkingへ」の潮流の中で重度の肢体不自由児
及び病弱児のキャリア発達支援の意義を考える
— キャリア発達支援研究会の10年の歩みから —

松浦孝寿¹・木村宣孝²

I はじめに

「キャリア教育」は、アメリカにおいて1971年当時の連邦教育局長官シドニー・P・マーランドが全米初等中等教育に準ずる教育改革の重点施策として提唱されたことに出発点があるとされ、その後、我が国においては「進路指導」の改善・充実を主眼として、中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」（平成11年12月）、国立教育政策研究所調査研究報告書「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」（平成14年11月）等を基盤とした様々な答申や研究等を通じた理論的構築がなされ、我が国における教育改革の重点施策として位置づけられてきた経過ある。

特別支援教育分野、特に特別支援学校におけるキャリア教育は、上記の経過を踏まえて高等学校学習指導要領（2009）にキャリア教育の推進が規定されたことと連動し、特別支援学校高等部学習指導要領（2009）に位置づけられことを契機に全国的な取組が始まったが、それに先立ち、国立特別支援教育総合研究所による課題別研究「知的障害者の確かな就労を実現するための指導内容・方法に関する研究」（2008）が実質的な出発点となっている。

この研究主題に象徴されるように、当初は知的障害教育分野、特に軽度の知的障害者を対象とした進路指導・職業教育及び就労支援の拡充に実践の焦点があてられたが、次第に他の障害種（肢体不自由教育や病弱教育等）における教育にも影響を及ぼし始め、知的障害教育では主に「ワークキャリア」に焦点をあてていたキャリア概念を、障害の重度とされる児童生徒にとってのキャリア教育の着眼点を「ライフキャリア」にあてるようになったことも概念的な転換点となったと考えられる。

1 北海道小樽高等支援学校

2 札幌大学地域共創学群

当初、我が国におけるキャリア教育は「端的には勤労観・職業観の育成」と認識されたことから、特別支援学校においても障害者雇用に必要となる資質・能力と連動させた教育実践として理解される方向性が指向されたが、雇用の対象とは考えにくい重度の障害者や社会参加に制限の多い病弱者に対して、「キャリア発達を促すキャリア教育」とは、どういふことなのかに関する理念的探究も並行して取り組まれてきたことは、特別支援教育分野におけるキャリア教育推進の特徴と考えることができる。

現在は、社会的参加・貢献と職業的自立のバランスが強調され、ライフキャリアの視点に立って、障害種や学校種に関わらずに全ての児童生徒等の生き方や支援のあり方を見直し、教育活動全体を充実させる考え方であることが理解され、各学校の教育活動全体を通じた「キャリア発達支援」がキャリア教育の意義として認識されるようになってきているが、一方で、特定の教育活動をもってキャリア教育とする実践も散見されることから、令和2年公示の特別支援学校学習指導要領解説には、実践に当たっての注意喚起を促す指摘もみられる。

他方、キャリア心理学の領域では、今日、「career から working へ」という新しい潮流があり、より広い意味での仕事（work）と関係性（relationship）に目を向けた方向に進んでいる（中村，2020）⁽⁴⁾。また、この working について、渡辺（2019）⁽¹¹⁾は、「すべての人は社会の中で生き、成長するという前提に立ち、変化する社会環境と積極的にかかわる（ワーキング）ことで、個々は成長する」と解説している。

今回、このような中、教育領域での重度肢体不自由児及び病弱児のキャリア発達支援の意義をより一層明確にするために、心理学領域における「キャリア心理学」、特に「career から working へ」という潮流の中でこれまでの実践を再考しようと試みた。

なお、研究フィールドを全国組織である「キャリア発達支援研究会」とし、研究材料をその機関誌等における実践報告を中心とした。そのため、当報告を、上記研究会の10年の歩みを俯瞰するという研究動向の報告という形式をとっている。

II 調査

1 調査概要

(1) 調査目的

病弱教育におけるキャリア教育の現状について、日本療育学会編著の標準「病弱児の教育」テキスト（谷口，2019）⁽¹⁾では、「病弱児の社会自立を支援するキャリア教育をどのように考え、実践を組み立てていけばよいのかについて方向性は確立していないのが現状である」と概説している。また、そこでは現場の教師の戸惑いの声として、「職場体験も

難しいし、場所の限定もある。病弱のキャリア教育と言われても何をすればよいのか分からない。」(同上)が記載されている。

また、そのような病弱養育におけるキャリア教育の現状の中、当テキストでは、キャリア教育の実際として、次のような校内研究の成果も紹介されているので引用して掲載する。

「校内研究として学校レベルでキャリア教育に取り組むこともできる。優れた一例として、東京都立北特別支援学校病弱教育部門（東大こだま分教室）の校内研究を紹介しよう（東京都立北特別支援学校，2018）。

東大こだま分教室は、平成 24 (2018) 年度から 3 年間にわたる校内研究として、「キャリア発達段階・内容表（試案）」（国立特別支援教育総合研究所，2010）を援用して、病弱教育独自の「キャリア教育流れ表」を作成した。作成に当たり、「つけたい力」として「人とかかわる力」「はたらく力」「自己決定する力」の 3 つの力を設定し、キャリア教育を移行支援として捉え、発達段階に応じた支援のねらいを体系化した。どのタイミングを焦点として考えた支援なのかという視点から、「入院中の現在への支援」「復学時への支援」「将来への支援」という 3 つの時期を設定し、3 つの視点から各支援のねらいの意味の重みづけを試みていることは、病弱教育における支援を捉える新たな枠組みの提示となっている。」

上記の「キャリア発達段階・内容表（試案）」の改訂版である「キャリアプランマトリックス（試案）」を付録 1、「キャリア教育流れ表」を付録 2 として掲載しておく。

さて、当報告では、このような病弱教育におけるキャリア教育（キャリア発達支援）の現状を再考する論点（視点）を整理し、提案することを目的に、次の調査を実施する。

（2）調査方法

当調査では、病弱教育におけるキャリア教育の意義を探索的に調査する。ここでは、まず、病弱教育の教育現場でのキャリア教育に関する現状（課題）を把握し、その結果を整理し考察するという帰納的方法をとる。これが、調査 1 と 2 にあたる。次に、その調査 1 と 2 の結果を、「career から working へ」という潮流の中で再考する。ここでは、キャリアカウンセリングに関する文献から、考察媒体として「working」の考え方を整理し、先の調査 1 と 2 の結果を再考するという演繹的方法をとる。

(3) 調査対象

調査対象としては、調査1・2では、キャリア発達支援研究会機関誌「キャリア発達支援研究」とした。当機関誌は、第1巻から第6巻で構成されており、現在、第7巻の発行が準備中である。

そのキャリア発達研究会の発足や研究活動経過の概要を当機関誌第6巻の巻頭言から引用し、紹介する。

「キャリア発達支援研究会は、平成23年1月に「キャリア教育推進者研究協議会」として国立特別支援教育総合研究所（以下、研究所）を会場にして開催したことに始まります。当時、キャリア教育の推進を目指していた先生方が全国から集まり、キャリア教育の実践を持ち寄って熱い思いで研究会を行い、初めて取り組むファシリテーションのワークショップに力を注いでいました。また、研究会の発足に先立ち、平成20～21年に研究所においては、「知的障害教育におけるキャリア教育の在り方に関する研究～「キャリア発達段階・内容表（試案）」に基づく実践モデルの構築を目指して～」の先行研究が行われ、特別支援教育におけるキャリア教育の推進・充実に向けた全国への情報発信が行われてきました。

一方で全国的な動向としては、平成21年の特別支援学校高等部学習指導要領の改訂において、総則の中で初めて「キャリア教育の推進」という文言が使われたことにより、全国各地の特別支援学校で「キャリア教育の推進」を掲げる学校が急増してきた時期でもありました。また、平成23年は「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（答申）が中央教育審議会から出された年でもありました。

さらに、平成25年からは筑波大学名誉教授の渡辺三枝子先生の全面的なご支援を受けながら「キャリア発達支援研究会」としてスタートし、今年で第7回を迎え、全国各地から多くの先生方が実践を持ちより情報共有する研究会として充実・発展してきました。

今回の学習指導要領の改訂で、「主体的で・対話的で深い学び」という文言などが示され、主体者としての児童生徒の側からの視点に重きを置かれたことは大きな転換です。そして、深い学びを引き出すための「カリキュラム・マネジメント」としての改革的意図の必要性、さらに、「社会に開かれた教育課程」という視点から学校と社会が目標を共有することにも言及しています。この視点は、まさにキャリア教育の理念そのものでもあります。個の社会的・職業的自立に向けた発達を促すためには、今を生きる子供たちと社会との関係を学校という枠組みを超えた中での取組が求めら

れています。」(森脇, 2019) ⁽¹²⁾

加えて、当巻頭言では、障害種・学校種を超えた研究活動の必要性を、次のように言及している。

「共生社会の実現に向けたインクルーシブ教育システムが充実・発展することによって、学校種別を超えた指導及び支援の連続性と学びの連続性が可能になると考えます。各地のキャリア発達支援の取組を学校種を超えて紹介することも、本研究会の役割でもあります。多様な事例に共通する視点としてのキャリア発達支援が、今後益々重要な意味をもつものと思います。」(同上)

調査3では、キャリアカウンセリング心理学に関する文献として、当機関誌での渡辺(2014, 2018) ⁽²⁾ ⁽³⁾ の論説及び、その論説で引用・参考文献となっているキャリア心理学の文献を、主に調査対象とした。

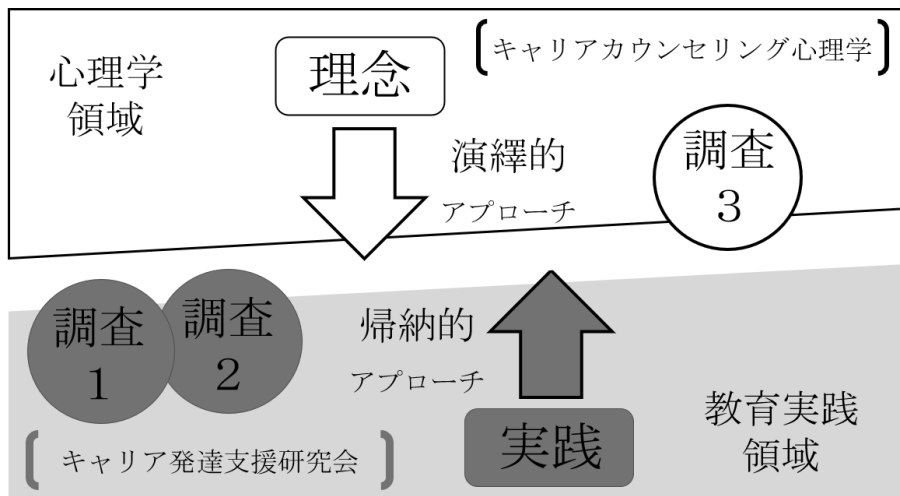


図1 調査構造

(4) 調査構成

当調査の構成を、図1のように整理することができる。この図の理念エリアは、キャリアの心理学に関する研究を最も発展させてきたとされる「カウンセリング心理学」分野のトレンドな情報であり、実践エリアは、病弱教育における教育現場からの情報となる。この理念と実践が、帰納的方法と演繹的方法で双方向の情報整理が実現する。なお、このような構成で調査を組み立てることによって、理念と実践の両面における問題意識をバランスよく保ちながら、病弱教育におけるキャリア教育（発達支援）の現状を再考する論点（視点）が整理できると考えた。

2 調査1

(1) 目的

病弱教育における教育現場から実践情報を収集する。その情報をもとに実践報告の標題と実践内容を俯瞰しての情報整理（量的整理）を行う。また、情報を図解し提示する。

(2) 方法

調査対象は、調査概要で紹介したキャリア発達支援研究会の機関誌「キャリア発達支援研究」第1巻から第6巻である。具体的には、実践編等から病弱教育等（肢体不自由教育を含む。以下、病弱教育等とする）でのキャリア教育（発達支援）の実践を検索し、リストアップする。さらに、資料編等から研究会におけるポスター発表項目からも病弱教育等関係の発表を検索し、参考まで、リストアップしておく。

なお、表1で、「キャリア発達支援研究」機関誌全6巻の標題と発行年月日等を紹介しておく。

(3) 結果と考察

ア 病弱教育等におけるキャリア教育（発達支援）の実践

全6巻を通しての実践編における病弱教育関係は、表2のとおりであった。

この機関誌における病弱教育等関係の掲載の実態（傾向）を、次のように整理（図式化）した。（図2）

まず、障害種別のカテゴライズを試行した。その結果、病弱教育と肢体不自由教育に加えて、重度・重複障害教育の3つに分類することができた。さらに、病弱教育と肢体不自由教育のそれぞれは、3つのキャリア発達支援の実践報告があり、重度・重複教育では、重度・重複障害のある子どものキャリア発達支援する意義についての理論面の報告であつ

第1巻

誌名 キャリア発達支援研究会 1 (2014,12,11 発行)
標 題 キャリア発達支援の理論と実践の融合を目指して
構 成 第Ⅰ部：論説, 第Ⅱ部：実践,
第Ⅲ部：「キャリア発達支援研究会第1回大会」記録

第2巻

誌名 キャリア発達支援研究会 2 (2015,12,7 発行)
標 題 キャリア発達を支援する教育の意義と共生社会の形成に向けた展望
構 成 第Ⅰ部：論説, 第Ⅱ部：実践, 第Ⅲ部：キャリア教育の広がり,
第Ⅳ部：「キャリア発達支援研究会第2回大会」記録

第3巻

誌名 キャリア発達支援研究会 3 (2016,12,5 発行)
標 題 新たな教育への展望を踏まえたキャリア教育の役割と推進
構 成 第Ⅰ部：論説, 第Ⅱ部：実践, 第Ⅲ部：キャリア教育の広がり,
第Ⅳ部：「キャリア発達支援研究会第3回京都大会」記録

第4巻

誌名 キャリア発達支援研究会 4 (2017,12,13 発行)
標 題 「関係」によって気付くキャリア発達, 「対話」によって築くキャリア教育
構 成 第Ⅰ部：座談会, 第Ⅱ部：論説, 第Ⅲ部：実践,
第Ⅳ部：キャリア教育の広がり, 第Ⅴ部：資料

第5巻

誌名 キャリア発達支援研究会 5 (2018,12,13 発行)
標 題 未来をデザインし可能性を引き出すキャリア発達支援
構 成 第Ⅰ部：座談会, 第Ⅱ部：論説, 第Ⅲ部：実践,
第Ⅳ部：キャリア教育の広がり, 第Ⅴ部：資料

第6巻

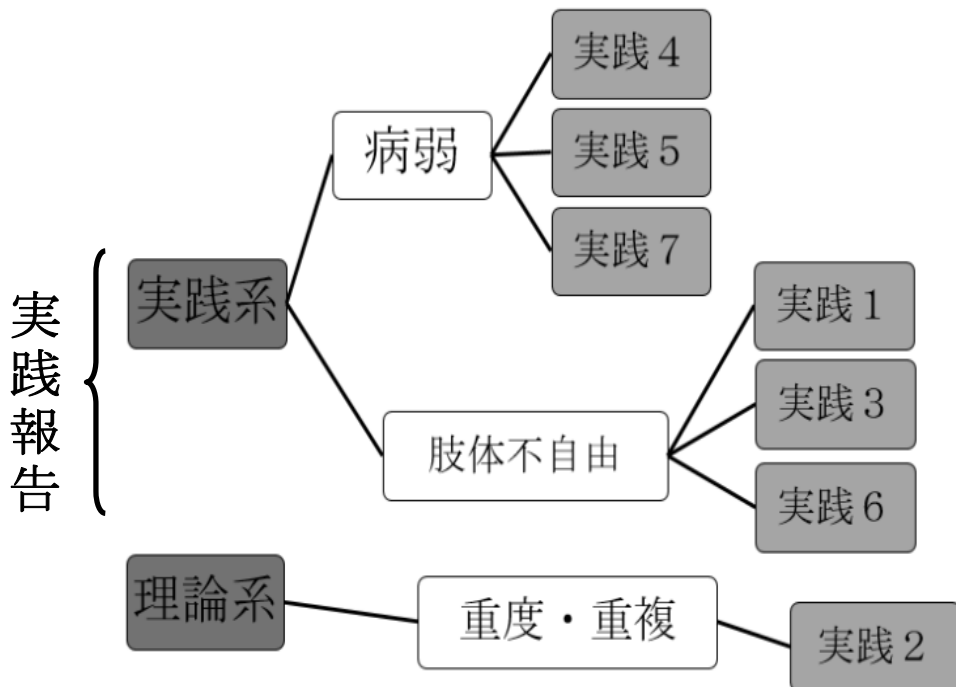
誌名 キャリア発達支援研究会 6 (2019,12,9 発行)
標 題 小・中学校等における多様な個のニーズに応じたキャリア教育
ー深い学びとキャリア発達支援ー
構 成 第Ⅰ部：小・中学校等における多様な個のニーズに応じたキャリア教育,
第Ⅱ部：座談会, 第Ⅲ部：論説, 第Ⅳ部：第6回大会より, 第Ⅴ部：実践,
第Ⅵ部：資料

表1 「キャリア発達支援研究」機関誌の標題等

た。ついでに、実践2は理論系の報告で、その他は実践系の報告とも分類できた。

それぞれの報告内容については、調査2で紹介する。

なお、当調査での障害名等の定義については、教育分野での用語解説を採用する。具体的には、「学校教育法施行令」、「重度・重複障害児に対する学校教育の在り方について（報告）」（1975. 文部省特殊教育の改善に関する調査研究会）等である。



（実践1～7は、表2を参照）

図2 機関誌実践編での病弱教育等におけるキャリア教育（発達支援）の実践（図式化）

実践事例 1

標 題 肢体不自由特別支援学校における進路支援
ーキャリア教育における進路支援の役割についてー
筆 者 渡部眞一
掲 載 キャリア発達支援研究 1

実践事例 2

標 題 重度・重複障害のある子供のキャリア発達支援を考える
筆 者 大崎博史
掲 載 キャリア発達支援研究 2

実践事例 3

標 題 児童生徒のキャリア発達を支援するための授業づくり
ー人とかかわるための力の向上を目指してー
筆 者 相坂 潤
掲 載 キャリア発達支援研究 3

実践事例 4

標 題 病弱虚弱教育におけるキャリア発達を促す取組
ー自己肯定感・自己有用感を育むことに着目した学習活動の工夫ー
筆 者 鈴木奈都
掲 載 キャリア発達支援研究 3

実践事例 5

標 題 病弱教育における ICT 活用とキャリア発達支援
筆 者 森山貴史
掲 載 キャリア発達支援研究 3

実践事例 6

標 題 子供たちの可能性を追求する
ー教科専科制とオリンピック・パラリンピック教育の取組を通してー
筆 者 達 直美
掲 載 キャリア発達支援研究 4

実践事例 7

標 題 病弱虚弱教育における高等部生徒の働く意欲を育む授業改善
ー学校設定科目「職業・実習」における受注作業の取組を通してー
筆 者 小坂春樹
掲 載 キャリア発達支援研究 4

表2 機関誌実践編での病弱教育等におけるキャリア教育（発達支援）の実践

第1巻

- ・肢体不自由学校における進路支援
ーキャリア教育推進における進路支援の役割についてー
-

第2巻

- ・肢体不自由特別支援学校におけるキャリア教育の推進
ー校内体制の整備と進路支援における課題ー
-

第3巻

- ・病弱特別支援学校におけるキャリア発達を促す取り組み
(キーワード) 病弱教育(筋ジストロフィー), キャリア発達, 役割不足, 関係機関との連携
-

第4巻

- ・病弱虚弱教育におけるキャリア発達を促す取組
(キーワード) 自己肯定感・自己有用感, 学習活動の工夫
-

第5巻

- ・肢体不自由教育部門との協働
(キーワード) 交流, 協働, 気づき
 - ・中村でのうんどうの取組
ー障害の重い子どものためのキャリア教育ー
(キーワード) 自立活動, うんどう, NMBP
 - ・病弱教育における実践
(キーワード) 病弱, 進路指導, 総合的な学習の時間, HR 活動
 - ・Motion History を用いた重症心身障害児の胸郭可動性評価の試み
(キーワード) 客観的指標, 重症心身障害児, 教育現場における身体アセスメント
-

第6巻

- ・小児慢性特定疾病のある生徒のキャリア発達
ー気づくことから成長したKさんー
(キーワード) 自分の体調を自分で話す, 本人の気づき, 教員が待つこと
-

表3 機関誌資料編(ポスター発表)での病弱教育等の実践リスト(参考)

3 調査2

(1) 目的

調査2では、病弱教育等における教育現場から実践情報を収集する。調査1が、実践報告の標題を俯瞰しての情報整理（量的整理）であるのに対して、当調査2は、実践報告の内容を解読し、情報整理（質的整理）する。

(2) 方法

調査対象は、調査1でリストアップした実践事例である。それぞれの事例を解読し、概要として整理する。また、その概要の傾向を分析して、事例相互の関係性を推察する。

(3) 結果と考察

ア 実践事例の概要

(ア) 実践事例1

当事例は、肢体不自由特別支援学校でのキャリア教育推進のための校内研修等の実践報告である。そこでは、卒業生の事例研究を通して、キャリア教育の重要性について適切に理解する等々の研修工夫が報告されている。また、教育実践の現場におけるキャリア教育について、次のように言及している。①中教審の「職業観・勤労観」という文言を、「社会で役割を果たすこと」と読み替えている。②言葉による誤解も含めて、キャリア教育の本質を理解する。③将来について卒業後に限定して考えるべきでなく、今を充実させることが重要である。

(イ) 実践事例2

当事例は、重度・重複障害における子どもにとってのキャリア発達とは何か、キャリア発達支援することの意義について、実践をもとに理論的に丁寧に言及している。冒頭では、「キャリア教育は、職業教育のことではないのですか。だから、あまり重度・重複障害のある子供達には関係ないのでは。」と記述し、キャリア教育での課題意識を明確にしている。当実践事例での理論的展開では、キャリア発達について、「社会との相互関係を保ちつつ自分らしい生き方を展望し、実現していく過程」との文部科学省（2006）による定義を引用して、「社会との相互関係を保つ」とは、社会における自己の立場に応じた役割を果たすこと、「自分らしい生き方」とは、様々な役割をその時々自分にとっての重要性や意味に応じて果たすことと確認し、上記の課題の解決の方向性を次のようにまとめをしている。①重度・重複障害のある子どもたちがあらゆる方法で人や社会と関わりを持ちながら、

その子自身が、自分らしい生き方を展望できるためのキャリア発達支援を行うことが重要である。②そのために、学びを丁寧考えることが大切で、それが、その子たちの将来の生活を支えることにつながる。加えて、具体的に、少し先の将来を見据えて、今、何が（どのような力）必要なかを考える視点を大切にする。

（ウ）実践事例3

当事例は、福祉型施設に併設する肢体不自由特別支援学校での授業実践の報告である。その実践では、個別の指導計画・個別の教育支援計画を活用し、「育てたい力」を明確にし、キャリア教育の視点での授業づくりについて捉え直している。そこでの「育てたい力」の中心として、「人とかかわる力（コミュニケーション力）」を挙げている。なぜならば、その力は、社会の中で役割を果たしていく上で重要であり、自分の意思を表現する、相手からの働きかけに応じるなどは、人とかかわっていく上で必要であるためとしている。キャリア教育の実践のまとめとしては、次のように言及している。すなわち、早期からのキャリア教育が重要であり、また、障害の重度・重複化から、いわゆる「ライフキャリア」の視点が重要である。

（エ）実践事例4

当事例は、病弱教育特別支援学校の実践である。当校では、脳性まひなどの重症心身障害児と筋ジストロフィーなどの進行性筋萎縮症児が在籍している。多くの児童生徒が隣接する病院から通学している。在学中から、自己肯定感・自己有用感を育むことに着目した学習活動の工夫を報告している。その工夫の1つに、社会福祉協議会と連携してのボランティア活動がある。その活動では、社会とのつながりの中で、チャレンジしたいという気持ちや自分の意思を育み、主体性のある行動ができるようになったと評価している。

（オ）実践事例5

当事例は、病弱教育特別支援学校等におけるICT活用について、キャリア発達支援の観点から考察している。まず、病状や本人を取り巻く環境等が変化しても教育的支援を途切れさせないようにすることが重要であるとしている。そして、支援として、病弱児への直接的アプローチと環境への間接的アプローチの2つに言及している。そこでは、間接的アプローチとして、ICT活用は他者から得られる様々な形態の援助と病弱児とのつながりを維持する上で効果的に機能すると考察している。キャリア発達支援の観点からは、上記の支援が得られるように本人や本人を取り巻く環境に働きかけ、「今、ここ」での自分

らしい生き方を実現できるよう支援していくことが、支援者の大事な役割であると指摘している。

(カ) 実践事例 6

当事例は、肢体不自由教育部門と病弱教育部門の2部門を併置する特別支援学校の実践である。その中で、肢体不自由教育部門の中学部に焦点をあてた報告である。2つの報告があり、1つは、教科専科制というシステムを生かしながら、学校教育目標や校訓等を踏まえて、学校全体や学部全体を俯瞰したキャリア発達支援の取組が報告されている。もう一つは、東京オリンピック・パラリンピックの開催を見通した4つのアクション（学ぶ・観る・する・支える）で社会参加する在り方について、様々な教育実践を紹介しながら報告している。上記の4つのアクションの中の「支える」では、ボランティアマインドを、社会に貢献しようとする意欲や他者を思いやる心と定義し、当マインドを育むことは、共生社会を目指す中で不可欠であると言及している。そして、障害のある子どもたちにとっては、自尊心を高める上でも、ボランティア活動は非常に効果があると指摘している。

(キ) 実践事例 7

当事例は、病弱教育特別支援学校での働く意欲を育む授業改善の報告である。当校には、普通学級・重複学級・重症心身障害児棟学級・訪問教育学級があり、普通学級には、精神疾患や心身症等、発達障害の二次障害による心因性の疾患を有する生徒が在籍している。授業改善では、学校設定科目「職業・実習」の見直しや生徒による模擬会社の設立等の教育課程及び授業の工夫を報告している。主体的に取り組むことができるように受注作業を設定し、模擬会社として授業改善を重ねてきたことは、作業をすることの喜びを感じることができ、働く上での人間関係の大切さや自分の仕事に対する責任の重要性に気づくことができたと評価している。加えて、今後、障害特性や性格等から、ほんのわずかなことにストレスを感じ、ストレス耐性が低い生徒が多いことから、ストレスマネジメントの学習が重要であり、自立活動で意図的に取り上げていく必要があると指摘している。

イ 実践事例の整理（視点の傾向）

それぞれの実践事例に共通の傾向にある視点を挙げてみた。結果は、次の3つが抽出できた。①社会とのつながり、②「今（現在）」を大切にすること、③「主体性ある自分らしさ」である。

①については、社会という概念を中核に据え、「社会で役割を果たす」「社会における自

己の立場に応じた役割を果たす」「社会との関わりをもちながら」「社会とのつながり」「社会に貢献しようとする意欲」等の表現があり、環境としての社会があつての個の存在について言及している。

②については、「今(現在)」という概念を中核に据え、「今を充実させること」「今、何が(どのような力)が必要なのか」「今、ここでの自分らしい生き方を実現する」等の表現があり、ここには、過去、現在、未来の時間的経過において「今(現在)」を中心に、過去の意味付け、価値付けをして、未来に向かって肯定的に歩み続けるという視点であると推察できる。

③については、「自分らしい生き方を展望できる」「自分の意思を育み、主体性がある行動ができる」「主体的に取り組むことができる」等の表現があり、肯定的な個の存在の視点を重視している傾向があつた。

さらに、実践事例での共通性は高くないが、4つ目の視点として、「人間関係」「人とかわる」「他者から得られる」等の表現が散見される。ここに、先の社会と個の関係性に加えて、関係性の基盤として個と個、または、集団と個のかかわりの視点の重要性を指摘していると解釈できる。病弱教育等におけるこの人間関係の在り方として、実践事例の中に、次のような表現もあつた。それは、「育てたい力として、人とかわる力(コミュニケーション力)」「ICT活用は他者から得られる様々な形態の援助と病弱児とのつながりを維持する上で効果的に機能する」「自尊心を高める上でも、ボランティア活動は非常に効果がある」等である。ここでは、「ストレス耐性が低い生徒が多いことから、ストレスマネジメントの学習が重要」の表現もあり、人間関係の育成の視点ゆえの配慮にも言及していた。

4 調査3

(1) 目的

病弱教育等におけるキャリア教育(キャリア発達支援)の現状を再考する論点(視点)を整理する。その論点(視点)から、調査1・2で整理した教育現場からの実践情報を再考する。そこで得られた知見を元に上記の論点の可能性も考察する。

(2) 方法

キャリアカウンセリング心理学の文献を調査対象として、「career から working へ」の論説を検索する。そこから、潮流としての「career から working へ」についての論点を整理する。その論点をもって、調査1・2で情報整理した実践事例の視点との共通点等を探究する。

(3) 結果と考察

ア「career から working へ」の潮流に関する文献

(ア) 調査3の発端となった文献

当報告の調査1・2の調査対象であるキャリア発達支援研究会機関誌の第1巻と第5巻において、渡辺(2014, 2018)⁽²⁾⁽³⁾は、キャリアカウンセリング心理学の立場から「working」について重要な提言を行っている。

まず、当研究会の発足期の第1巻で、キャリア発達研究の歴史的流れの20世紀末の新たな動向をテーマに、次のように「working」という用語について言及している。

20世紀末から21世紀初期にかけて、アメリカの心理学者、特にキャリア・カウンセリング心理学者で、キャリア発達の理論化に取り組まれている研究者の間では、キャリアという用語にかえて「ワーク (work)」とを用いる方がよいという見解が提唱されだした。すなわち、経済成長の激しかった20世紀初期においては、元来キャリアという社会的用語には人と社会構造とのあいだの相互作用の研究で用いられてきたが、その後、労働市場における職業構造の研究に関心が集まるようになるにつれて、キャリアという考えの中には職業構造、特にその垂直に進むという意味が内蔵されるようになった(Barly, 1989)。言い換えれば、キャリアという用語には、高度経済成長時代の職業生活の残影がつきまとっているからである(Richardson, 2012)。

したがって、個人の心理社会的な生涯発達の視点にたつとき「働く」という行動、選択行動、適応等に焦点の当てられる中立的な言葉である「ワークの方が望ましいであろう」という意見が心理学者の間で提唱されている(例: Blustein, 2011; Peterson & Gonzalez, 2005)。

加えて、今後の課題～キャリア発達アプローチから教育の現代的意味を考える～として、次のように特別支援教育の職業教育の教育課程と「working」という用語についても言及している。

キャリアは日本においても理解困難な言葉である上に、上述したように上昇志向を創造させる可能性が高い。その意味で、21世紀のアメリカの研究者たちが主張した提案は警鐘に値すると思われる。特に特別支援教育では「働く、ワーク」としての職業体験、作業学習の方が教育課程に即した意味になるのではないだろうか。ちなみにイギリスの義務教育段階では、「働く、work learning」という言葉を耳にする。

さらに、第5巻では、特別支援教育とカウンセリングは人間観と目標を共有すると題して、キャリアカウンセリングとキャリア発達の支援の関係を再考し、「career から working へ」という潮流の解説につながる言及を、次のように掲載している。

しかし、アメリカ合衆国では、キャリア教育の誕生と同時期の1980年以降では、カウンセリング心理学を基盤として、その独自性が研究され現在に至っている。それはカウンセリング誕生の歴史発祥の発達過程とカウンセリング心理学の独自性を検討して、100年の歴史を貫いてきた存在意義と実践研究の成果から、「社会変化の中に生きる個人の発達の支援」をカウンセリング心理学の中核の価値観としていることである。したがってその具体的な活動領域としては、主として教育領域であり、「働くことの意味」の追求である。昨今は社会経済の変化の衝撃の大きい人々で支援を必要とする、心身の障害のある人、性的マイノリティ、人種差別の対象者等（Blustein, et al., 2014）に注目が集まった。特に、カウンセリング心理学の100年の歴史を振り返ると、心理学（特に発達心理学）を土台としながら、その人間観、社会変化の個人への影響に着目し、その存在意義を問い続けてきた歴史でもある。そして、「現在は変化する社会環境のなかで change agent（変化を作り出す人）としての役割を果たすこと」を強調している。その理由は、特に弱者と言われる人々の支援のためには、個人の努力だけに頼るだけでなく、彼らの人権を守るという視点から、地域の人々と社会自体が関心を持って、社会を変える努力を必要とするからである。

こうしたアメリカのカウンセリング学会の変遷の原動力でありつづけた不変の人間観は、日本の特別支援教育に通ずると思う。特に日本では、地域社会や企業との関係作りへの学校側の大変な努力と工夫の成果が、障害者の対する理解を深めている。例えば、学校が意図的に計画したプログラムをもとに、若年者も地域社会の人々との接触を通して、学校教育で学ぶ以上の、「社会人としての社会的発達」が促進させられていることと一致すると思われる。

社会的発達とは、単に作業・職業能力をつけることではない。地域社会の人々との接触を通して、生徒だけでなく地域社会の大人たちの社会性と発達も促しているのである。こうした特別支援教育全体の抱える問題の根を明らかにし、それを改善するために特別支援学校では多様な取り組みが試みられている。このような現実を直視する研究者の目と改善のための多様な活動の発展を通して、「人と人との出会い」が人を生涯発達させ得ることも実感した。

ここで指摘している「現在は変化する社会環境のなかで **change agent**（変化を作り出す人）としての役割を果たすこと」という言及は、当報告の目的である重度肢体不自由児及び病弱児のキャリア発達支援の意義を再考するにあたり、大きな示唆を与えるものである。

次に、重度肢体不自由児及び病弱児が、**change agent**（変化を作り出す人）として存在する有意性を、「**working**」の視点で詳細に解説、紹介している文献を探索した。

（イ）調査3の中核をなす文献

当機関誌での「**working**」の考え方を契機に、「**career** から **working** へ」という潮流の知見を追求探索した結果、次の中村（2020）⁽⁴⁾の論説の中核をなす文献と位置づけることにした。

職業心理学（**vocational psychology**）の関心は、個人と仕事とのマッチングである職業選択（**vocational choice**）に始まり、個人の職業人生の発展に焦点を当てるキャリア発達（**career development**）を経て、より広い意味での仕事（**work**）と関係性（**relationship**）に目を向ける方向に進んでいる。

これまでは、キャリアといえば、原則として賃金を得る職業人生に関する話であることが前提であったが、今では、それ以外の生活を含めた人生全体の満足度を考える方向へと向かっている。キャリアという概念には人生という意味も含まれているからだ。

広い意味での仕事には、労働市場においてお金を稼ぐために働く賃金労働（**market work**）だけでなく、社会のなかで、町内会の当番、マンションの理事会、PTA 役員、子育て、家族の介護など、様々な役割を果たすために働く非賃金労働（**personal care work**）も含まれる。人は、仕事上の人間関係（**market work relationships**）だけでなく、家族や友人、ご近所との個人的な人間関係（**personal relationships**）に囲まれて生活している。（中略）

アメリカでは、20 世紀末ごろから「キャリア」についての議論がはじまった。キャリアは家庭や社会でのあらゆる活動を包含し、収入を得るための職業だけのことではないという指摘が出てきたのである。キャリアに関する研究は、働きたくても働けない状況にある人々を含む社会的立場の異なる人々の社会の一員としての働きにまでは目を向けて来なかったという批判もされるようになった。

その議論のなかで、「キャリア」という言葉ではなく、**working** という言葉を使おう

うとする新たな動きが生まれている。**working** の和訳は、「働くこと」「仕事（をすること）」「労働（すること）」などであり、的確な日本語が見つからないものの、少なくとも、働くことの多様な意味に目を向けるきっかけを与えてくれる。

働くこと（**working**）の概念の徹底には、「人は他者との関係性のなかで生き成長している。他者との関係なくして生きられない。」という社会的存在としての人間という人間観がある。したがって、賃金労働としての、生活の保持や社会的地位を意味する職業だけでなく、賃金をともなわないボランティアワークや奉仕活動もまた働くことであり、障害をもつ人のように一見他者の手助けを受けることで生活できる人であっても、そこに存在することが他者に影響を与えているという意味で、働いているといえる。

ここでの「『人は他者との関係性のなかで生き成長している。他者との関係なくして生きられない。』という社会的存在としての人間という人間観がある。」は、教育分野で中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(2011)⁽⁵⁾で、キャリア教育について、「キャリア教育とは、一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達促す教育」として、社会的自立と職業的自立のバランスを強調した再定義と、方向性を同じくすると解釈することができる。上述した答申では、付説において次のとおり、この再定義について解説している。

中央教育審議会「初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）」（平成11年）では、キャリア教育を「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」とし、進路を選択することにより重点が置かれていると解釈された。また、キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書（平成16年）では、キャリア教育を「『キャリア』概念に基づき『児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育』」にとらえ、「端的には」という限定付きながら、「勤労観、職業観を育てる教育」としたこともあり、勤労観・職業観の育成のみに焦点が絞られてしまい、現時点において社会的・職業的自立のために必要な能力の育成がやや軽視されてしまっていることが課題として生じている。

イ「working」の考え方を整理し活用するにあたって

さて、調査3では、調査1・2での実践事例を、「working」の考え方で再考してみる。そこでの再考の際の論点（視点）として、ここまでのキャリアカウンセリング心理学の探索から、次のキャリアカウンセリングの背景にある理念及び人間観（中村，2016）⁽⁶⁾を援用することにした。

<キャリアカウンセリング心理学の人間観>

- ・個人はすべての行為の主体であり自立的存在である人格としての尊厳をもつ。人格は理性的本性と自由とを所有しているため、自分のことは自分で決定し、自分と他人とに対する責任をとることができる。
- ・人は成長する存在である。一人ひとりが自分を知り、自分で考え、自分で決める力を養うことで、自分が成長し社会に役立つことに喜びを感じる。
- ・個人は社会のなかで成長し、社会（環境）との相互作用なしに存在しない。

<キャリアカウンセリング心理学の人間観の土台となる価値観や信念>

- ・個人の深層の心理的力よりも、個人とその環境（対人的、対社会的など）との葛藤という角度により重点を置く。
- ・援助の目標を、個人が自己および自分の生きる現実を認識し、それと対面し、現実と取り組む能力を育て、現実（環境）のなかでその人らしく生きることにする。
- ・個人の選択、価値、可能性を重視して、悪いところを直すのではなく、成長につながる個々人の体験に焦点をあてることで、発達を促す。
- ・未来を信じる。どのように意思決定したかを認識していれば、予想との違いにも気づき対応できるので、今できる最善の選択をする。

これは、教育現場における教師をはじめとするすべての支援者に示唆を与えてくれるものであり、この論点（視点）で、調査1・2でリストアップした実践事例を再考してみる。

ウ 実践事例の再考

（ア）帰納的視点と演繹的視点の接点

まず、調査1・2の結果から抽出した教育現場での実践事例を捉える視点を帰納的視点として、キーワードで再掲すると次のようになる。

①社会性（環境）、②今（現在）、③主体性（自分らしさ）、④関係性

次に、調査3の結果からのキャリアカウンセリング心理学の人間観・価値観等の視点を演繹的視点として、同じくキーワードで再掲すると次のようになる。

①対社会的、対人的、②未来を信じる、③個人（主体）、④相互作用、相互発達

この帰納的視点と演繹的視点に一致性があると考察でき、そこから、特に、教育実践現場での実践者にとって、キャリア心理学の理論的知見は、教育信念等々を支える機能性があると推察する。

中村（2016）⁽⁶⁾は、キャリアカウンセリング心理学の人間観・価値観・信念の言語化にあたって、次のようにも言及している。

課題を前にして、理念そのものが問題を解決するわけでないとしても、確固とした理念を有するカウンセラーは、それに基づいて問題を解決する方法を考えることができるはず。クライアントが抱える課題に共に向き合うプロセスは、カウンセラー自身の理念、つまり人間存在の本質に関する考え方、価値観、信念に左右されるのです。

(イ)「working」の用語としての有用性

次のように、中村（2020）⁽⁴⁾の「working」についての解説を再掲してみる。

働くこと（working）の概念の徹底には、「人は他者との関係性のなかで生き成長している。他者との関係なくして生きられない。」という社会的存在としての人間という人間観がある。したがって、賃金労働としての、生活の保持や社会的地位を意味する職業だけでなく、賃金をともなわないボランティアワークや奉仕活動もまた働くことであり、障害を有する人のように一見他者の手助けを受けることで生活できる人であっても、そこに存在することが他者に影響を与えているという意味で、働いているといえる。

上記の解説が、次に掲載する中央教育審議会「特別支援教育の在り方に関する特別委員会」第4回ヒアリング資料で、木村（2010）⁽⁷⁾が言及する「障害の重度の子どものキャリア教育の明確化」への1つの方向性を示唆すると考察する。

障害の重度の子どものキャリアは、「ライフキャリア」の視点から幅広くとらえ、学校生活、家庭生活、地域生活や、卒業後の福祉的就労などにおける様々な「役割の遂行」と、その役割を果たす「本人の意味付け・価値付け」を支援するところにキャリア教育の意義があるものと理解することが大切である。

障害の重度の子どもの「キャリア発達」をとらえるには、「言語」のみならず、「行動」によって表現される欲求実現行動や、選択・価値付けの行動など（例えば、「興味や関心」、「微細であっても目的的な表情の変化や発声、身体の動き」、「人とのかわりにおけるその子どもなりの傾向、指向性」、「目的達成のための行動スタイル」、「感性（その子どもなりの感じ方）」など）から推察することが可能と思われる。

この視点は、マズロー（Maslow, 1954）の「自己実現欲求（人間の中に存在する、成長や進歩に向けて自己の可能性を最大限に実現していこうとする欲求）」とそれに至る欲求の階層と重ねながら理解することも考えられる。

このように、障害の重度の子どもの「成長や進歩に向けての自己の可能性の発揮」をとらえる観察力、洞察力は、教師に求められる人間理解のための重要な視点であり、障害者権利条約の総論に掲げられた教育にかかわる目的を達成するために必要な教師の専門性と言えるものと考えられる。

その方向性とは、中村（同上）の言及する「障害のある人のように一見他者の手助けを受けることで生活できる人であっても、そこに存在することが他者に影響を与えている」がゆえに、木村（同上）の言及する「教師の専門性」の向上にも影響するということである。

ここに、病弱教育等におけるキャリア発達支援の新たな視点を認識することができ、キャリア心理学分野における「career から working へ」の潮流は、教師の専門性の向上等で教育分野に有用性があると理解する。加えて、木村（2020）⁽⁸⁾は、次のようにも、その有用性を評価している。

「キャリアを超えて ワーキング心理学－働くことへの心理学的アプローチ（渡辺三枝子監訳，2018）では、各章で「人種」「ジェンダー」「LGBT」「貧困」「家庭人」そして「障害」のある人々について、ワーキング心理学の視点からの研究成果や諸問題が紹介されている。

これらの各カテゴリーの中には、我が国においても、もはや目を背けてはられない重要課題の分野が含まれ、それは、「労働」や「雇用」等の範囲を超え、哲学的であるが「人間存在」としての探究にまで及ぶ広大な領域をカバーしている。さらに言

例えば、最重度とされる幼児児童生徒も含めたキャリア発達支援の研究・実践に取り組む我々にとって、多いに学ぶべき研究領域であること、そして我々の研究成果は、より多くの人々への支援理念の開発・構築に寄与することになるであろうことが示唆されるのである。

このように、「working」の視点で、病弱教育等を理解することが、同時並行的に、ここでの教育実践者・支援者の職能開発、加えて、教育現場での研究・研修の開発・発展につながるという有用性を理解することが大切である。

5 総合考察

ここでは、当報告の目的の達成度を評価する。

さて、その目的は、病弱教育等におけるキャリア教育（キャリア発達支援）の現状を再考する論点（視点）を整理し、提案することであった。

そこで、次の調査1～3を行った結果を総括する。

調査1・2では、帰納的手法を用いて、病弱教育等の教育現場におけるキャリア教育の実態を把握した。その概要から、教育実践を構成する4つの視点を抽出することができた。それを、キーワードで整理するならば、①社会性（環境）、②今（現在）、③主体性（自分らしさ）、④関係性であった。

次に、調査3では、演繹的手法を用いて、「career から working へ」という潮流について、文献検索をもとに、その意味を探究した。病弱教育等において、「working（働く）」を、「障害をもつ人のように一見他者の手助けを受けることで生活できる人であっても、そこに存在することが他者に影響を与えているという意味で、働いているといえる。」（中村、2020）⁽⁴⁾と解釈でき、上記の「他者」には支援者も含まれており、ここでの支援の充実に影響を与えると理解することもできた。ゆえに、これまでの実践事例を再考する論点（視点）として「working」の有用性を確認した。さらに、取り上げた文献の理念を、キーワードで整理するならば、①対社会的、対人的、②未来を信じる、③個人（主体）、④相互作用、相互発達であった。そして、上記のこれらキーワード（①②③④及び①②③④）から、帰納的アプローチと演繹的アプローチの結果の一致性を確認でき、これらのキーワードそのものが、病弱教育等におけるキャリア教育（キャリア発達支援）の現状を再考する論点（視点）として認識することもできた。

なお、調査を終えての課題としては、調査対象が限定的であったことである。ゆえに、今後、教育現場をフィールドとする調査活動が有効である。また、「career から working へ」

という潮流を適宜把握するために、心理学分野・教育分野等のトレンドな動向を継続的に調査する必要もある。

Ⅲ おわりに

当報告では、キャリア心理学分野の潮流である「career から working へ」の概念からみた実践再考の論説を行ってきた。この論説の論点（視点）を継続かつ発展させる上での指標となる見解を紹介して、当報告のおわりとする。

(1) ワーキング心理学を学び続ける

当報告を終えるにあたって、特別支援教育に携わる実践者である筆者は、キャリア教育の充実・発展に向けて、ワーキング心理の知見を学び続ける必要性の認識を、さらに深めるに至った。

次の文献の一節が、ワーキング心理学についての継続的な学びに導いてくれる。渡辺(2014) 監訳の「キャリアを超えて ワーキング心理学-働くことへの心理学的アプローチ-」⁽⁹⁾での「訳者あとがき」で、作田(2014)は、次のように言及している。

カウンセリング心理学が、社会の変化を直視して、究極のウェル・ビーイング(well-being)に到る未踏の課題領域を解明する上で、困難に直面している多くの人々(貧困,ハンディキャップ,高齢者,ジェンダーなど)をも包含する中核概念として「キャリア(career)」を超えて「働く(working)」にその本質を見出している視点を重視して、本書では“psychology of working”を「ワーキング心理学」と訳すこととした。

加えて、当文献の役割として、次のようにも言及している。

「20世紀の仕事上の問題のために開発された解決策が21世紀の仕事上の問題を解決するには不十分であることを示している」と説くブルスティン博士の主張は、不確実で不安定なグローバル社会に立ち向かう私たちの覚悟への問いかけでもあるように思われる。

本書がブルスティン博士の提言の紹介に留まることなく、人がこれからの社会の中で、生きること、働くこと、学ぶこと、役割を担うこと、活動すること等に関心をもつ多くの方々とともに、“work”の概念に“care work”と“market work”と言う視点も取り入れながら、新たな一步を踏み出すための一冊となり得れば望外の喜び

である。

そして、ワーキング心理学に期待されることのひとつとして、次のように指摘している。

人類の歴史の中で、超高齢者社会を先導する私達にとって、組織のなかでの“market work”だけでなく、地域社会コミュニティにおける“care work”のあり方を含めて、『ワーキング心理学』の課題領域を探求することが、「働くこと」を充実し得ていない多くの人々に、未来をもたらす可能性を秘めていること。

ここでの“care work”と“market work”については、その汎用性を期待するところである。そのために、私たち実践者は、用語の活用において、自己流の解釈に陥らずに、その理念をしっかりと学び続ける姿勢が不可欠である。このことについては、渡辺(2012)⁽¹⁰⁾は、キャリア教育の導入期において本来のキャリア教育が理解しづらい混乱期があったことを指摘している。ゆえに、その混乱期からの教訓を忘れてはならない。

(2) キャリア発達を支援する実践者が理論を学ぶ姿勢

先に考察したように、「working」の理論(理念)が、同時並行的に実践者の専門性の向上に有用性があることを、改めて認識することが重要である。専門家と言われる実践者にとっての「ワーキング」の意義については、木村(2020)⁽⁸⁾が、次のように言及している。

渡辺氏は著書「キャリア心理学」の改訂版の発行にあたり、次のように述べられている。

「私共は、キャリアの心理学の諸理論を学習し、かつそれをカウンセラーとして実践するためには、たえず、自分の価値観や人間観、キャリア観と対峙しながら、既存の理論の中に自分の価値観や人間観と一致する理論を見つけることが必要となる。」と。

私たちが、専門家であるがゆえの「学び」と実践に伴う「責任」は、グローバルに変化し続ける社会にあって、その時点で得ることのできた知見に対する個々の「納得解」を、さらに「最適解」へと進化させていく歩みのプロセスを絶やさないことである。ここに、我々の「ワーキング」の意義、そして価値がある。

私たちキャリア発達を支援する実践者は、理論を学び続ける必然性があり、それを通し

て児童生徒等に還元する誠意ある姿勢が求められ、加えて、そこから得られる研究成果は、多くのマイノリティへの支援観の構築に寄与することも考えられるのである。

最後に、当報告のおわりにあたり、渡辺（2020）^{（8）}が総括する「理論を学習する意味」を視座として、実践者として理論を学び続けることを表明する。

- ・理論は結果の予測可能性を向上させるものである。
- ・理論はキャリア・カウンセリングが遭遇した現象・事実を説明・解釈・整理するてがかりとなる。
- ・理論は仮説を生み出すための基盤となる。

IV 引用・参考文献

- （1）谷口明子（2019）：キャリア教育．標準「病弱児の教育」テキスト．日本育療学会編著．ジーアス教育新社．
- （2）渡辺三枝子（2014）：アメリカでのキャリア発達研究の理論展開と我が国における課題．キャリア発達研究1．ジーアス教育新社．
- （3）渡辺三枝子編著（2020）：新版キャリアの心理学〔第2版〕－キャリア支援への発達のアプローチ－．ナカニシヤ出版．
- （4）中村 恵（2020）：キャリアから「働く（working）」へ．新版キャリアの心理学〔第2版〕－キャリア支援への発達のアプローチ－．ナカニシヤ出版．
- （5）中央教育審議会（2011）：今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）．
- （6）中村 恵（2016）：今後に向けて－激変する環境のなかでのカウンセラーの役割－．キャリアアカウンセリング実践－24の相談事例から学ぶ－．ナカニシヤ出版．
- （7）木村宣孝（2010）：障害のある子どものキャリア教育の現状とあるべき姿について．中央教育審議会 特別支援教育の在り方に関する特別委員会 第4回 ヒアリング資料．
- （8）木村宣孝（2020）：第7回大会基調講演「キャリアからワーキングへ」に寄せて－渡辺氏との出会い、「対話」、そして深い学びへの探求－．キャリア発達支援研究会．第7回年次大会金沢大会．
- （9）David L. Blustein Ed. (2014) : The Oxford Handbook of the Psychology of Working. Oxford University Press. 渡辺三枝子監訳, 五十嵐敦, 大庭さよ, 岡田昌毅, 作田 稔, 田中勝男, 中村 恵, 廣川 進, 道谷里英訳 (2018) : キャリアを超えて ワーキン

グ心理学－働くことへの心理学的アプローチ－. 白桃書房.

- (10) 渡辺三枝子 (2012) : キャリア教育の理念と今後の課題. 特別支援教育 No.46. 文部科学省. 東洋館出版社.
- (11) 渡辺三枝子 (2020) : 第7回大会基調講演レジュメ. キャリア発達支援研究会. 第7回年次大会金沢大会.
- (12) 森脇 勤 (2019) : 巻頭言. キャリ発達研究6. ジーアス教育新社.

V 付録

国立特別支援教育総合研究所 (2010)

知的障害のある児童生徒の「キャリアプランニング・マトリックス (試案)」
(知的障害のある児童生徒の「キャリア発達段階」内容表 (試案) 改訂版)

高 等 部

中 学 部 (中学校)

小 学 部 (小学校)

キャリア発達の段階

職業的 (遠隔) 発達にかかわる能力

キャリア発達段階	小 学 部 (小学校)	中 学 部 (中学校)	高 等 部
キャリア発達段階	職業及び生活にかかわる基礎的な能力獲得の時期 生活化があるが、職業及び生活にかかわる基礎的な能力を十分に獲得し、職業生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。	職業及び生活にかかわる基礎的な能力を十分に獲得し、職業生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。	職業及び生活にかかわる基礎的な能力を十分に獲得し、職業生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。
職業的 (遠隔) 発達にかかわる能力	知的障害のある児童生徒の「キャリア発達段階」内容表 (試案) 改訂版	知的障害のある児童生徒の「キャリア発達段階」内容表 (試案) 改訂版	知的障害のある児童生徒の「キャリア発達段階」内容表 (試案) 改訂版
人間関係形成能力	社会的な生活環境の中で、自分や他者との関係を築き、必要に応じて必要な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。	社会的な生活環境の中で、自分や他者との関係を築き、必要に応じて必要な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。	社会的な生活環境の中で、自分や他者との関係を築き、必要に応じて必要な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。
情動活用能力	自分の感情や他者の感情を認識し、必要に応じて必要な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。	自分の感情や他者の感情を認識し、必要に応じて必要な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。	自分の感情や他者の感情を認識し、必要に応じて必要な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。
作業設計能力	作業や活動を行う上で必要な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。	作業や活動を行う上で必要な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。	作業や活動を行う上で必要な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。
意思決定能力	自分の意思や他者の意思を認識し、必要に応じて必要な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。	自分の意思や他者の意思を認識し、必要に応じて必要な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。	自分の意思や他者の意思を認識し、必要に応じて必要な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。知的障害のある児童生徒からは、学校及び生活に必要となる基礎的な能力を身に付けていく。
知的障害のある児童生徒の「キャリア発達段階」内容表 (試案) 改訂版	知的障害のある児童生徒の「キャリア発達段階」内容表 (試案) 改訂版	知的障害のある児童生徒の「キャリア発達段階」内容表 (試案) 改訂版	知的障害のある児童生徒の「キャリア発達段階」内容表 (試案) 改訂版

※本試案における「能力」とは、competencyのことを指す

付録 1

「キャリアプランニングマトリックス (試案)」(国立特別支援教育総合研究所, 2010)

